

東南アジアにおける焼畑農業

飯 島 茂

は じ め に

東南アジアは北部山岳地帯の亜熱帯大陸性気候から、南部の海岸や島嶼における海洋性気候に至るまで、地理的にはたいへんに複雑な景観をなしている。この地域はまた人類の歴史の流れのなかでは、ポケット地帯であったので、1～2の例外を除くと、巨大な帝国の建設を見なかった。従って、中近東におけるイスラム教圏、また西欧におけるキリスト教圏が経験したような歴史的“地ならし”がおこなわれなかったために、文化的にはひじょうに多様性に富んでいると言えよう。しかしながら、東南アジアを貫く共通性もまた見逃す訳にはゆかない。なかでも、“山地”と“平野”の問題はその重要なひとつであろう。

東南アジアのどの国でも、相対的に同質的な多数の住民は平野部に住み、国家を形成している。それと同時に、仏教（ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ国、ビルマ）、イスラム教（マレーシア、インドネシア）、キリスト教（フィリピン）などの世界宗教を信仰し、かれらの一部がこれらの国と世界文化との接点になっている。

一方、東南アジア諸国の山地を中心に、かなりの数にのぼる少数民族が住んでいる。かれらは雑多な言語を話すなど、文化的統一性はなく、その上、それぞれの国家に対して政治的には完全に統合されていない場合が多い。

ところで、“山地”と“平野”という自然的景観の差異は東南アジアの経済の基礎である農業のあり方を規定している。すなわち、山地における焼畑農業と平野における水田稲作農業とに分けている。もちろん、これは平野部の限界地で焼畑がおこなわれたり、山地の谷間で水稻栽培がわずかながらおこなわれている事実を否定するものではない。¹⁾

では、本稿で扱おうとする焼畑農業がこの地域でいかにおこなわれているか調べてみよう。

I 焼畑農業の類型

東南アジアおよびその周辺部における焼畑農業の基本形態は、雑穀型、陸稻型、根菜型の三つの類型に分類される。しかしながら、現実にはこれらの基本形態のほかに、混合型の焼畑農

1) たとえばタイ国の例では Nan とか Kanchanaburi でおこなわれている。cf. Judd (1964), Stern (1965), Kunstadter (1967) p. 369, 飯島 (1965)

業が存在し、分布している。焼畑農業の研究に長年従事している地理学者佐々木高明の研究によると、次のように分類することができる。²⁾

(1) 陸稲卓越型

インドシナ半島の山岳地帯からマレーシアの島嶼部にかけての亜熱帯・熱帯林

(2) 陸稲・根菜型

フィリピンからインドネシア島嶼部の熱帯降雨林

(3) 陸稲・雑穀型

雲南から台湾にかけての大陸部亜熱帯・暖帯の森林地帯（温量が低いと雑穀卓越型になる）

(4) 雑穀卓越型

ヒマラヤ、アッサム山地から北ビルマ、中国南部、日本にかけての東南アジア周辺部の照葉樹林帯

(5) 根菜型

ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアなどの南太平洋島嶼部における熱帯降雨林

ここに見る焼畑農業の5類型のうち、東南アジア・プロパーでは陸稲卓越型と陸稲・根菜型が支配的である。またこれらの分類とは多少系列を異にするが、大陸部東南アジアにおいてはけし栽培が広範におこなわれている。これはたいへんに重要な問題を含んでいるので、次節で多少立ち入って言及することにしよう。

II 焼畑農業の問題点

今日、東南アジア諸国の政府は程度の差こそあれ、焼畑の問題に頭を痛めている。そのうち重要な問題は次の5点に要約できよう。

1. 森林の荒廃

現在までのところ、一般的に焼畑農業は経済性のある森林の外部でおこなわれてきているので、伝えられているよりは森林資源に対して実害が少ないように思われる。しかしながら、大谷滋氏がフィリピンのミンダナオ島の例をあげて指摘するように、一部では森林資源に被害がすでに現われ始めている。たとえ、熱帯降雨林のように、植生にとって“天国”のような所ですら、森林資源は無限に存在している訳ではない。さいわい、各国政府も焼畑による森林の荒廃には注意を払い始めたので、今後さらに抜本的対策が立てられることが望まれる。これは水資源の保護のためにも大切なことである。その際には、森林地帯の“先住民族”である山地民の利益が十分に保護されなければならないのは当然のことである。

2) 佐々木 (1966)

2. エロージョンとサバンナ化

焼畑農業は一般的に山岳地帯の傾斜地でおこなわれている場合が多いので、雨量の多い地域ではエロージョンが烈しい。さもないと Imperata のようなつる草³⁾がはびこって、2次林が形成されてしまう。さらに、1カ所での焼畑期間が長期に渡ったり、耕作頻度が高い場合には土壌の劣悪化も進む。かくして、焼畑の跡地はしばしば農業用に再使用しにくくなる。

ビルマ北部の一部、タイ国中東部から東ラオスにかけての大陸部東南アジアの比較的雨量が少なく、乾燥した地帯では、焼畑の跡地はサバンナ化して、これまた農業に再利用するのが困難になってゆく。

3. 低経済性と生産の不安定性

陸稲が焼畑で栽培されると、反当り収量を玄米に換算すると、平均して4〜8斗ぐらいしか収穫できない。これは日本の普通の畑における陸稲生産の平均反収1石2斗の $\frac{1}{3}$ 〜 $\frac{2}{3}$ にしか当たらない。佐々木の算定によると、1戸当りの耕作面積は、現技術水準を前提とすると、1.4〜1.8 ha ぐらいなので、人口支持力は25〜30人/km²にしかないと言う。しかも、焼畑農業に限らず、水稻に比べると、陸稲は早魃にきわめて弱いので、生産の不安定性はかなりおおきいと思われる。

また、焼畑の可能な森林が近年減少する傾向にあるために、1カ所での連作回数が増えたり、焼畑の跡地に戻ってくる年数が短縮されたりする所も少なくないといわれる。このようにして、焼畑の土地生産性は各地で低下の傾向をたどっている。たとえば、タイ国北部の山地カレン族の間では、ここ数十年の間に、陸稲の反当り収量がじつに $\frac{1}{3}$ になってしまった。これは肥沃度の枯渇のみならずせん虫などによる虫害⁴⁾、いや地など三つの原因が考えられる。しかし、真相を究明するためには、農業の専門家による本格的な研究が望まれるのである。

いずれにしても、以上のような諸条件のために、近き将来東南アジアの山岳地帯では、平野部以上に急速なる食糧不足、従ってまた、人口過剰におちいり、重大な社会問題や政治問題が発生するのではないかと懸念される。

4. けしの栽培

けしはある程度冷涼な気候が必要なために、東南アジアではおもに大陸部の山岳地帯で栽培されている。国民の保健上の理由と、けしがもたらす高収益にともなう国際勢力介入を防止するために、各国政府も最近ではその対策に苦勞をしている。たとえば、タイ国においては、サリット首相時代の1958年にけし栽培禁止令が布告された。

しかしながら、ここで問題となることは山地民に高収益をもたらしていたけし栽培を禁止した場合に、いったいどのような代替作物をかれらに与えることができるかということである。

3) Thailand (1966) p. 31

4) 渡部忠世教授の示唆による。

このことは東南アジア各国の政府の苦慮するところである。ちなみに、けし栽培が山地民にどの程度の収益をもたらすか、タイ国政府内務省公共福祉局の調査に基づいて述べてみよう。⁵⁾

タイ国北部の山地民は、だいたい1人当り $\frac{1}{2}$ ～1ライ(0.8～1.6反)ぐらいけしを栽培することが可能である。 $\frac{1}{2}$ ライしか栽培しない場合にはかなり集約的に作ることができるが、1ライ栽培する場合には、相当に粗放的になる。そのため、これらの栽培法による収量にはあまり差異がないと言われる。年平均は、ヘロインにして1人約1キログラムの収穫があると言われる。1958年前後には、ヘロインが1キログラム当りだいたい800～1000バーツ(1バーツは18円弱)していたので、中間をとって900バーツとすると、邦貨にしてキロ当り約16,200円になる。従って、山地民の1家の労働人口を4人平均とすると、年収が3,600バーツ、これを円に換算すると、62,800円になる。この所得を日本の水準に比べると、あまり高収益の作物でないような印象を受けるかもしれないが、現地の経済事情のもとでは、きわめて収益率の高い農産物と言えよう。タイ国北部では、谷間にある市場町でさえ、労賃は低く日当にして90～180円くらい、女中の賃金は3食付で月に約1,000～1,800円である。かくして、けし栽培による山地民の収入が現地の水準から言っていかに高いものであるかが分かるであろう。

このため、タイ国政府では内務省公共福祉局山地民課が中心になって、目下熱心にけしに代わる代替作物を探し求めているのだが、これに見合った適当な作物はまだ見つかっていない。

けしの代替作物としては、次のような条件が満たされることが必要であろう。

- (1) けしほどではないにしても、高い経済性を持つ作物でなければならない。
- (2) 山地民の技術による粗放栽培が可能なこと。
- (3) 作物の脱穀とか調整が比較的容易で、それに特別高度の知識や農具などが不必要なこと。
- (4) 道路などの交通事情が悪く、市場までの距離が遠いので、その農産物がいたみにくく、容積も重量もあまり大きくないこと。

このように、けしの代替作物を開発するのは、競合する条件が少なくないために、きわめて困難な仕事である。しかしながら、山岳地帯の冷涼な気候を十分に活用できるような亜熱帯系や温帯系の作物や果樹の導入に努力が傾けられれば、あるいは活路が見出せるかもしれない。⁶⁾

5. 政治問題—国民形成と国境問題—

東南アジア諸国にとって、山地民などの少数民族を国民国家のネットワークの中に吸収してゆくことは、近代国家建設のために不可欠なことである。しかしながら、焼畑農業に従事している山地民は移動性が高く、人口すら正確に把握できないので、中央政府にとってもはなはだ対策が立てにくい。また、かれらは領土国家とか国民国家という感覚が欠如しているために、

5) Thailand (1966) pp. 34-35

6) ちなみに付け加えると、熱帯の人の温帯系の果実に対するあこがれは想像以上に大きい。たとえば Chiangmai のような町では日本の山積みりんごが1個150円ぐらいもするのだが、それでも買う人がある。

しばしば行政上の問題や国境問題をひきおこし、政府は手を焼く場合が多い。従って、長期的にはなんらかの形で、山地民を定着させることが必要なのである。

以上、焼畑農業の問題点について、5項目に分けて指摘をおこなってきた。このうち、最後の政治問題を除くと、すべては広義の農学に関係のある問題である。しかも、従来は外国人はもとより、現地の人たちにとってもあまり目立たない問題だったので、ほとんど対策が立てられていなかった。だが、東南アジアの真の安定を考える時には、焼畑農業に従事する山地民の問題を無視することはできない。かれらに農業技術援助の手がさしのべられることがつよく望まれる。

III 焼畑民の定着化について

前節で述べた“焼畑農業の問題点”の解決については、各国政府とも頭をしばっている。しかしながら、なんと言ってもその第一歩は焼畑民の定着を促進させて、安定した農業をいとなませることであろう。

これについて、注意を喚起しておきたいことは、焼畑農業は山地民の統合された文化体系の一部であるということだ。従って、山地民をたんに物理的に移動を中止させ、定着させるだけでは十分な施策とは言えないのである。

たとえば、筆者が調査した山地カレン族の場合について具体的に説明すれば、次のような事情を明確にすることができる。

この山地カレン族は約半世紀ほど前から“自発的”に定着化の方向に向かった。その理由は二、三考えられるが、森林の相対的不足がおもな原因であろうか。いずれにせよ、定着化に向かった山地カレン族は農業生産を維持するために、生産の比較的安定している水田稲作の技術を平地に住んでいるタイ系の住民から学んだ。そうすると、移動困難な水田の属性により、山地カレン族の定着化は決定的なものになる。また、それは元来土地所有観念のなかったかれらに土地所有観念を植えつける契機を与え、焼畑用の森林にすら占有権を発生させるきっかけをもつくる。

また、焼畑農業による移動性が停滞すると、long house は解体に向かう。村全体が移動して歩く必要が減少するからであろうか。現在山地カレン族は粗末ではあるけれども、タイ族と基本的にあまり変わらないタイプの村落を形成している。

かくのごとく、山地カレン族の文化においては、焼畑農業のような文化の一部分に変化が起ると、文化全体に深刻な影響を与えずにはおかない。このような訳であるから、将来われわれがもし東南アジアにおける焼畑農業の問題解決に援助の手をさしのべる場合には、農業の技術問題とだけ割切ることなく、社会学者との協力がつよく望まれるのである。もっとも、このことはカレン族のような山地民の農業問題に限ったことではない。東南アジアのような低開発

国の農民の間では、経済社会、宗教などが未分化であるために、開発計画の実施に当たっては、自然科学者や技術者と社会科学者の密接なる協力が不可欠なように思われる。

IV お わ り に

これまで東南アジアにおける焼畑について述べてきたが、この研究がいろいろな理由で、ほとんど社会科学者、とりわけ人類学者の手にゆだねられてきたことをここで指摘しておきたい。たとえばベトナムにおける Condominas, フィリピン Conklin, また、ボルネオの Freeman にしろ、現地調査によって名著を残した学者はすべてこのカテゴリーに属している。その後タイ国で仕事をおこなった Judd も農学の素養はあるけれども、本来は社会学者である。これらの仕事のうちには質的にたいへんに高く、人類学者の間では“古典的”な本としての評価を受けているものもある。それらは社会科学者のおこなった農業研究としては、考える最高のできばえであることは間違いないが、著者たちが農学畑出身でないために、部分的には画竜点睛を欠くきらいがないでもない。従って、今後は農業専門家の協力による焼畑農業の本格的調査研究、さらにはそれに基づいた対策の立案がなされなければならないであろう。

参 考 文 献

- 飯島茂 (1965) 「タイ国北部における山地カレン族の文化変容」『東南アジア研究』第2巻第4号, pp. 2~9.
- 飯島茂 (1966) 「タイ国における山地民問題と Tribal Research Centre」『東南アジア研究』第4巻第1号, pp. 164~168.
- 佐々木高明 (1966) 「東南アジアの焼畑の輪栽様式と人口支持力」川喜田二郎ほか編『人間—人類学的研究』pp. 391~421. 中央公論社.
- Burling, Robbins (1965) *Hill Farms and Padi Fields-Life in Mainland Southeast Asia*. New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- Condominas, G. (1957) “Nous avons mangé la forêt de la Pierre-Genia Gôo.” *Chronique de Sar Luk*. Paris: Village Mnong Gar.
- Conklin, H. C. (1957) *Hanuoo Agriculture, a Report on an Integral System of Shifting Cultivation in Philippines*. FAO Forestry Department Paper No. 12, Rome.
- Freeman, J. D. (1955) “Iban Agriculture, A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak.” *Colonial Research Studies*, Vol. 18.
- Judd, Laurence C. (1964) *Dry Rice Agriculture in Northern Thailand*. Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, Data Paper No. 52, Ithaca.
- Kunstadter, Peter (1967) *Southeast Asian Tribes, Minorities, and Nations*, Vol. I. New Jersey: Princeton University Press.
- Stern, Theodore (1965) *Research upon Karen in Village and Town; Upper Khwae Noi, Western Thailand*. Bangkok. (mimeograph)
- Thailand, Department of Public Welfare (1966) *Report on the Socio-Economic Survey of the Hill Tribes in Northern Thailand*. Bangkok: Ministry of Interior, Department of Public Welfare.